●「百人一首（ひゃくにんいっしゅ）」って何？　ＦＡＱ

＊「百人一首」とは？

百人の有名な歌人の**和歌**を、一首ずつ選んでまとめたものです。

鎌倉時代中期（十三世紀）頃、**藤原定家**[1]という歌人によってまとめられました。京都の小倉の山荘で編集されたことから、「小倉百人一首」とも呼ばれています。



紅葉



五重塔



桜

＊「和歌」とは？

「五・七・五・七・七」の三十一音で作られている、短い詩です。例えば、「百人一首」の一番の歌の始めは「秋の田の」ですが、これは五つの音でできています。一緒に手で叩きながら数えてみましょう。「あ、き、の、た、の」。五つの音ですね。これは、五つの**「拍」**として数えられます。「拍」のことを、音声学では**「モーラ」**と呼びます。モーラは、日本語のリズムの基本単位で、「ていか」と音読みされています。

1　実際には「さだいえ」と訓読みであったと思われますが、慣習として、

大体かなの一文字が一モーラにあたります。[2] ですから、和歌のことを「**三十一文字**」とも言います。

和歌は、単に「**歌**」とも呼ばれます。一首、二首・・と、「**首**」という単位を使って数えます。和歌の前半の「五・七・五」は「**上の句**」、後半の「七・七」は「**下の句**」と言います。[3]



貝殻



携帯



紅葉

和歌は、公の儀式の場や、私的な生活の場など、さまざまな場面で詠まれていました。天に国家の繁栄を祈願したり、個人の内面の感情を込めたり、また、友人や恋人どうしのコミュニケーションの道具として使われたりもしていました。和歌を詠む人たちもまたさまざまで、現存する最古のたりもしていました。

---

2 撥音（「ン」）・促音（「ッ」）・長音（「ー」）もそれぞれ一モーラとして数えます。但し、拗音（「キャ」「キュ」「キョ」など）はかな二文字で表記されますが、あわせて一モーラです。

3 「上の句」・「下の句」の区分は形式上のもので、意味のまとまりには関係ありません。

歌集である「万葉集」（八世紀頃成立）には、天皇から庶民まで、幅広い階層の作者の歌があります。「百人一首」に収められた歌の作者は、天皇、貴族、僧侶などが中心です。男性も、女性も、います。「百人一首」をまとめた藤原定家も、朝廷に仕えていた男性貴族です。

＊「百人一首」は、現代でも親しまれているのですか？

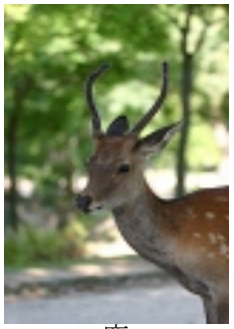
はい。文学としても、また、お正月の「**かるた**」としても、とても親しまれています。

「かるた」というのは、カードを使ったゲームです。「かるた」という語は、ポルトガル語で「カード」という意味の ｃａｒｔａ を音訳したものです。

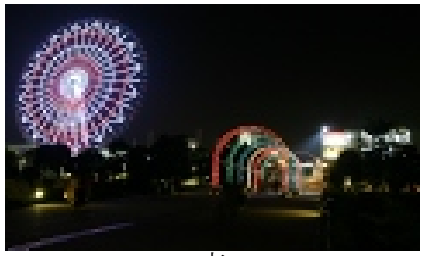
一般の「かるた」は、「**読み札**」（短い文章の書いてあるカード）」を一人の読み手が声を出して読み、それにあてはまる「**絵札**」（絵の描いてあるカード）」を、並べてある多くの絵札の中から、他の人たちがさがします。早く見つけて取った人が勝ちで、取った枚数を競い合います。

「百人一首」の「かるた」では、「**取り札**」（取るのを競い合うカード）」には絵でなく、和歌の「下の句」だけが書いてあります。「読み札」には和歌が一首全部書いてあり、それが読み上げられるのを聞きながら、あてはまる「下の句」の取り札をさがして取るのです。和歌を暗記していれば、最後まで聞かな

くても正解の札を取ることができます。このため、「百人一首」を百首全部覚えている人も少なくありません。特に、**「む」「す」「め」「ふ」「さ」「ほ」「せ」の七枚は、「一枚札」「一字決まり」**などと呼ばれます。これは、それぞれの音で始まる歌が「百人一首」の中には一首しかなく、最初の一文字の音を聞いただけで取り札が特定できる、という意味です。「百人一首」は、最も長いものでも「六字決まり」です。つまり、最初の六文字までの音で、下の句を決めることができるのです。このため、「百人一首」の「かるた」競技は、古典の優雅なイメージとは裏腹に、瞬間のスピードが競い合われます。これを、古典の格闘技のようだ、とたとえる人もいます。「百人一首」のどの歌が何字決まりか、皆さんも考えてみませんか？[4]


鹿


篝火


夜景

---

4 「百人一首」には、他に、読み札に描かれた歌人の絵だけを使う「**坊主めくり**」という遊び方もあります。これは、和歌の知識とは全く関係なく楽しめます。どんな遊びか、調べてみましょう。

＊「和歌」は、「短歌」や「俳句」とはどう違うのですか？

「和歌」と「短歌」は、「五・七・五・七・七」の同じ形式です。一般に、明治より前の古典的・伝統的なものを「和歌」、明治以降の近代のものを「短歌」と呼んでいます。明治とは、一八六八年から始まる、日本の近代化の時代です。このころ、歌の世界でも近代化が行われたため、呼び名も変わったのです。[5]

「俳句」は、「五・七・五」の形式で、必ず「季語（季節を表す言葉）」を含みます。十七世紀頃成立した詩形ですが、「俳句」と呼ばれるようになったのは、やはり明治の近代化以降です。有名な句をいくつか挙げてみます。

菜の花や　月は東に　日は西に　（季語＝菜の花・季節＝春）　与謝蕪村

やれ打つな　蠅が手を摺り　足を摺る　（季語＝蠅・季節＝夏）　小林一茶

柿食へば　鐘が鳴るなり　法隆寺　（季語＝柿・季節＝秋）　正岡子規

旅人と　我が名呼ばれん　初時雨　（季語＝時雨・季節＝冬）　松尾芭蕉

---

[5] 但し、「万葉集」に収められた古い時代の歌には、長短さまざまの形式があり、その中で「五・七・五・七・七」は短いので「短歌」と呼ばれていました。その後、他の形式は衰え、「短歌」だけが残り、単に「歌」というとこの形式を指すようになったのです。「和歌」は、日本の歌、という意味です。これは、中国の詩を意味する「漢詩」に対立する語です。

なお、短歌・俳句の近代化を唱えた**正岡子規**は、千円札でおなじみの明治の文豪・**夏目漱石**の大親友です。


菜の花


猫


柿

＊現代語と古典語はどのくらい違うのですか？

発音・表記・語彙・文法すべて、現代語と古典語では異なります。古典語も時代によって大きく変わります。その一つに、「かなづかい」、つまり、かなの使い方の違いがあります。

どこの言語も同じですが、発音は時代とともに変化していき、文字による表記と一致しなくなっていきます。そこで、時代によってさまざまな「かなづかい」が考えられてきました。現代語のかなづかいを「**現代かなづかい**」、それ以前のかなづかいを「**歴史的かなづかい**」と言います。歴史的かなづかいは、例えば「**てふてふ**」と書いて「**チョーチョー**（蝶々）」と読んだりするなど、現代の発音とはかなり違っています。現代かなづかいは現実の発音に表記を近づけようとしていますが、助詞「は」「へ」「を」などには

歴史的かなづかいの跡が残っています。（発音はそれぞれ、「ワ」「エ」「オ」ですね。）

この「百人一首コラム」では、古典語は歴史的かなづかいで表し、音読する時の発音はカタカナで示します。現代かなづかいと歴史的かなづかいの違いについては、それぞれの歌で具体的に説明します。



蝶